

試験の内容及びその結果

専攻・分野	国際コミュニケーション専攻 日本語学・日本語教育学分野	氏 名	Ni Wayan Prilyasinta
試験担当者	主査 教授 坂本 正 副査 教授 宇治谷 映子 副査 教授 大岩 昌子 副査 甲南大学（外部審査委員） 教授 藤原 三枝子		

1. 試験の内容

論文申請者、Ni Wayan Prilyasinta の博士学位論文「インドネシア人日本語学習者の動機づけの変化とその要因 ―縦断的な調査から―」の公開口述試験が2020年2月10日（月）、14時から16時まで215講義室で行われた。内部審査委員は、主査が坂本正教授、副査が宇治谷映子教授、大岩昌子教授、ならびに、外部審査委員として甲南大学の藤原三枝子教授の4人である。最初の1時間でNi Wayan Prilyasinta が博士論文の概要と得られた知見を説明し、10分休憩ののち、約1時間、審査委員からの意見陳述、論文申請者との質疑応答が続いた。口述試験終了後、審査委員は別室に移動し、30分ほど論文の内容、口述試験に関する評議を行い、可否に関わる意見の一致を得、最終的に結果を出した。主な質問およびコメントの内容は次の通りである。

主な質問としては、1) 4つの動機づけに絞った理由は何か、2) 4つの動機づけの細分類の項目はどう決めたか、3) 2度、学習者にアンケート調査しているが、その期間がどうして異なるのか、4) A大学とB大学の2つの大学を選んだ理由は何か。5) A大学とB大学、それぞれ結果を分けて、報告しているが、どうして統合した結果を出さなかったのか、6) どうして学年に分けて分析したのか、7) 結果の一般化はできるのか、8) 調査1の結果の報告は具体的にどのようにしたのか、9) 2度目のアンケート調査では、2年生と3年生の動機づけが低下せず、維持できているが、それは、教師に対する動機づけ調査の結果の報告があったからか、10) 「内発的動機づけ」「外発的動機づけ」はどちらの大学も下がっているが、「理想の自己を目指す動機づけ」「義務の自己による動機づけ」はあまり変わっていないのはどうしてか、11) 要因のなかに、例えば、「教師の教え方」があるが、やる気を高めるプラス要因としても、やる気をなくさせるマイナス要因としても出ており、全く正反対の評価が出ているが、それはどうしてか、12) 学習日記を書くこと自体が動機づけに影響している可能性もあると思うが、その点はどうか、と様々な角度から質問がなされたが、論文申請者は、審査委員の質問を

試 験 の 内 容 及 び そ の 結 果

十分に理解し、必要に応じて先行研究の例なども挙げ、分かりやすく、説得力のある回答をしていた。

主なコメントとしては、1) 各大学 100 人以上のアンケート調査、30 人の学習者の学習日記などは、今後さらに量的研究、質的研究をする際にも貴重な資料となる。2) 動機づけに関する理論を整理して、わかりやすくまとめている。3) オリジナルの質問紙を作成している。4) 動機づけ調査の結果の報告を受けた日本語教師がどのように授業での教え方が変わったかなどの分析がより詳細になされると、教育現場に大きく貢献する。5) 今後、質問紙を作成するときには、程度を表す表現や主観的な表現は避けたほうがいい。6) 質問紙の質問の仕方は、「外発的動機づけ」のほうは、「～だから～する」、「内発的動機づけ」のほうは、「～すると楽しいから～する」「～したいから～する」と形式を統一したほうがよい。7) 自分の学習に対する振り返りを通して、学習者の自律性の育成につながる研究も、今後、この学習日記分析を通して可能である。8) 学習日記を書いてもらう際のガイドラインを作っておくと、よりピンポイントの言語データが得られる。9) 調査期間中、学習日記を書いてくれた学生に何か還元できるものがあるとさらによい。10) 検定をかける際の前提条件などもしっかり確認していて、また、統計分析だけでなく、質的な分析もとても充実しているいい論文である、というコメントがあった。

2. 試験の結果

本学位審査委員会は、以上を総合的に判断し、本申請論文が博士学位論文としての水準に達していると認め、博士の学位を授与するにふさわしいと判断し、「合格」と判定した。

(以上)